

2026年 2月10日 会報174号	かわち野に吹く風 歴史探訪8 ～もう一つのなら・奈良～	東大阪文化財を学ぶ会 会 長 南 光 弘
-----------------------	--------------------------------	-------------------------

2026年2月27日（金） 雨天決行（警報中止）

1. 集合時間 午前 9時（時間厳守）受付 8時45分～ 解散午後3時頃
2. 集合場所 近鉄奈良駅 行基菩薩像前
3. 費 用 拝観料（般若寺 500 円、五劫院は志納料、500 円以上が妥当です。各自で納めて下さい）
4. 行 程 （全行程徒歩約5～6km）

氷室神社→古城園→（旧京街道・転害門・空海寺・南都の石橋）→五劫院・見返り地蔵尊→（奈良阪）→北山十八間戸→夕日地蔵尊→般若寺⇄植村牧場（レストランで昼食）→（旧奈良監獄・旧奈良少年刑務所）→多聞城跡→聖武天皇陵→近鉄奈良駅

※旧京街道の北端、東大寺の北、般若寺を経て木津川市木津に向かって北へ緩やかに登っていく一帯は、奈良阪と呼ばれた。奈良の北の玄関口として、また吉野や伊勢、伊賀へ抜ける交通の要衝として江戸時代には多くの旅籠や商店で賑わい、また古くは南都焼き討ちの軍勢も、東大寺の建材もこの奈良阪を越えてやってきた。かつての交通の要所で、様々な歴史の表舞台に登場する。般若阪とも呼ばれた。

この「奈良阪」がもう一つのなら・奈良

※転害門（てがいもん）切妻造り、三棟造り、八脚門（本柱を含んで12本）横幅約17.5m、高さ約10m
・大仏殿から見て「吉兆の方位」。「害を転じる」に由来するという説。

・転害門が建つあたりの古来の地名「手貝」「天貝」「手蓋」に由来するという説。

※植村牧場のレストランで昼食。弁当の持ち込みが許されていません。ランチメニューは1400円前後。

① 氷室神社 （宮司さんのお話があります）

祭神は、鬨鶏稻置大山主命、大鷦鷯命（おおささぎ）、額田大仲彦命。創建は和銅3年（710）、元明天皇の勅命による。古城川上流の月日磐に氷神を奉祀し、厳寒に結氷させたものを氷室に蓄え、翌年に平城京へ献氷させる制度が創始された。翌和銅4年（711）6月1日に初めて献氷の勅祭が興され、以降毎年4月1日より9月30日まで平城京に氷を納めた。

氷が朝廷でどのように用いられていたかは、当時の『律令』の条文によってうかがえる。喪葬令第14条には、親王、三位以上の者が6、7月に亡くなると、氷を支給するとの規定がある。また、職員令第53条からは、主水司（もひとりのつかさ）が氷室のことを担当していたことが分かる。主水司は宮内省管轄の部署で飲料水に関することを扱い、氷は当然食用にあてられた。

奈良朝7代、70年余りの間はこの制度は継続したが、平安遷都後は廃止され、貞観2年（860）、清和天皇の時期になって、現在の地に奉遷され、左右2神を併せ三座となった。社殿が建立されたのは建保5年（1217）とされている。

以来、春日大社の別宮に属し、式年費用や営繕費、祭礼費などは春日社、興福寺の朱印高2万石、および社頭所祿、三方楽所料2千石などの一部によって行われたが、明治以降はこの制度も廃止され、氏子と冷凍氷業界の奉賛により維持される形になっていた。

《表門・東西廊》

春日造の一ノ鳥居が、登大路に面する。鳥居を入ると両側に石灯籠が立ち並び、右手に手水舎、左手に境内社の祓戸社がある。右手の石灯籠、手水舎の背後には、鏡池と枝垂れ桜がある。正面石段を登ると表門（四脚門）と東西廊がある。表門・東西廊、この3棟は奈良県指定有形文化財であり、棟札が建物の附（ついたり）として指定されている。棟札によると、表門は寛永19年（1642）の修理であり、内裏の日御門扉および金5枚



を寄付されて修復されたとある。門は四脚門形式で屋根は本瓦葺、東西廊は門に接続し、それぞれ桁行3間、梁行2間である。

《本殿》

三間社流造・檜皮葺で江戸時代末期の造替といわれる。本殿床下には2室があり、両開き板戸がつけられている。本殿前の拝殿は、勾欄付きで舞楽殿となっている。

② 吉城園

吉城園は、興福寺の子院、摩尼珠院（まにしゅいん）があったところとされている。明治に民間の所有となり大正8年（1919）に現在の建物と庭園が作られた。企業の迎賓施設の時代を経て、昭和の終わりから奈良県が所有し庭園を公開している。

園内は池の庭、苔の庭、茶花の庭からなり、苔の庭には離れ茶室がある。

③ 思惟山五劫院（しゅいざんごこういん）・見返り地蔵尊（住職さんのお話があります）

＜五劫・果てしなく長い時間を瞑想されたお姿の仏様を安置する古刹＞

東大寺の北側にある五劫院では、重源上人が宋から請来したと伝わるご本尊の五劫思惟阿弥陀仏坐像（重文）と涅槃図が喜ばしいことに特別開帳中。

「五劫院」は、東大寺の末寺であり、東大寺中興の祖である重源上人によって創建されました。重源上人は当時、中国の宋に渡り、浄土教の高祖である善導大師の作と伝わる「五劫思惟阿弥陀仏」を請来し、東大寺北門にご本尊として一堂を建立したのが始まり。

又、当寺の墓地には、重源上人だけでなく、もう一人の中興の祖である公慶上人も祀られ、浄土宗の寺院でありながら、華嚴宗・東大寺の菩提所としての役割も果たしているという。

そもそも「劫」とは、「劫（こう）」とは、仏教やインド哲学において、測り知れないほど長い時間を表す単位。古代インドにおける最長の時間の単位とされており、一つの宇宙が誕生し、消滅するまでの期間を指すこともあるという。ヒンドゥー教では1劫を43億2000万年と数えることがある。

「五劫」は、正に人智では計り知れないほどの長い時間を指す。まだ法蔵菩薩の頃に修行を重ねられた結果、螺髪が伸びてアフロヘアのようになったといわれ、これが悟りを開いて阿弥陀如来となられた瞬間のお姿と、お寺の方がお話しされた。想像を絶する努力を重ねられた偉い如来様なのですが、写真を観ても分かるように、実物はどうみても可愛らしい。ヘアースタイルはサイケなアフロだし、お顔立ちはぶっくらして童女ようで、眺めていると思わず笑みがこぼれる程だった。



④ 北山十八間戸

寛元元年（1243）、西大寺の忍性によって建造されたとされる。当初は般若寺の北東にあったが、永禄10年（1567）、東大寺大仏殿の戦いによる戦災で焼失し、寛文年間（1661～1673）に現在地（般若寺の南二町）に再建されたとみられる。元禄6年（1693）に修築されたが、板戸の何枚かは創建当時のものが使われている。建物は切妻造、本瓦葺、全長約38m・幅約4mの東西に長い棟割長屋で、内部は18室に区切られ、部屋は小さく約2畳でさらに東端に仏間も設けられていた。壁に文殊菩薩と忍性さんの仏画が掛けられていた。廊下はなく、奥の部屋に行くのも手前の部屋を通過しないといけない構造。



ハンセン病に苦しむ人々のためにつくった福祉救済施設で衣食住を提供してきた。収容者の数は、延べ1万8千人といわれている。国の史跡に指定されている。

(※松本清張『砂の器』主人公の父がハンセン病患者)

≪忍性菩薩≫

良観房忍性は、建保5年(1217)に大和国城下郡屏風里(磯城郡三宅町)で誕生。若くして僧侶となり、西大寺の叡尊を師として、真言密数や戒律受持の教えを授かり、貧者病人の救済にも身命を惜しまなかった。

特にハンセン病患者を毎日背負って北山に通ったという(『元享釈書』等)。ここからも仏教徒らしい慈悲深く意志の強い忍性の人柄が窺うことができる。

後半生は活動の拠点を鎌倉に移し、より大規模に戒律復興と社会事業を展開した。人々の救済に努めた忍性に後醍醐天皇は「菩薩」号を追贈した。

忍性菩薩の師、西大寺の叡尊上人は民衆救済の典拠の一つとなる文殊菩薩の信仰にも篤かった。西大寺お堂内に文殊菩薩騎獅像(獅子に乗る文殊菩薩)が祀られている。「貧しい人や病の人は文殊菩薩の化身」といわれている。

⑤ 夕日地藏尊

西向き地藏さん「夕日地藏尊」。高さ2.4m。脇には、会津八一が詠んだ夕日地藏の歌が書かれた木札があり、

ならさかの いしのほとけのおとかひに こさめなかるる
はるはきにけり

(歌意) 奈良坂の路傍に立つ夕日地藏の顎(あご)から小雨が流れている。春がきたのだなあ。

般若寺境内には、夕日地藏を詠んだ会津八一の歌碑がある。

左:夕日地藏尊 右:見返り地藏尊・朝日地藏尊(五劫院)



⑥ 般若寺

創建は諸説有る。天平年間に初めて名が登場しています。最盛期には、学徒千人を数える規模だった。楼門(国宝・鎌倉時代)、十三重石塔(国重文・鎌倉時代)は、宇治浮島の十三重石塔とともに鎌倉時代を代表する石塔。奈良街道を塞ぐような形で、般若寺が建立されているところから、京都への南都諸寺の出城のような位置付けがあったのかも知れない。

平家物語では大激戦地となり、平重衡四万余騎に対して、南都衆人7千余騎がこの坂(寺)で激突。南都側はよく持ちこたえたが、最後には焼失している。そして、東大寺、興福寺など天平の名刹が悉く灰燼に帰している。

鎌倉時代になって、僧叡尊・忍性により再建されたが、松永三好の戦いでまた焼失している。大仏を焼いた重衡の墓は、お隣の木津町に立派な石塔として残っている。

宮本武蔵の「般若坂」の決闘もこの辺り。兎に角、京都からの街道が、最初に奈良に入る交通の要衝で、多くの歴史ドラマが生まれた。

≪僧叡尊≫1201年~1290年

西大寺を中興するとともに、般若寺・法華寺・室生寺など、奈良・大和の寺々の復興に努めた。自分だけの悟りではなく、衆生を全て救おうとし、広く授戒した。奈良阪に集まる被差別賤民やハンセン病患者など一人ひとりを文殊菩薩の化身に見立て斎戒を授けた。また、宇治橋や道路を整えるなど社会事業に携わった。

⑦ 松永久秀と多聞城

永禄2年(1559)、三好長慶の家臣松永久秀が、大和に入って筒井氏(興福寺の衆徒の頭としてこの頃大和で勢力を持っていた)を追い、翌年奈良のか眉間山に多聞城を築いた。奈良は初めて武家の支配下におかれた。多聞城は、近世の城の初めといわれるもので、4階の櫓を備えた壮大なものであった。

奈良を訪れた宣教師アルメイダは、「城壁は白く明るく輝き、建物は杉(桧?)の木で造られていて、中に入ると芳しい香りに満ちている。廊下や部屋の板張りは一枚板でできているようだし、壁や柱には金が張

られている。庭は都で見たものよりは、はるかに優雅である」という風にその印象を述べ「世界中この城の如く善かつ美なるものはあらざるべし」と目を見張っている（フロイス『日本史』）。



久秀は、京都・堺・奈良の三都を握って勢力をふるい、三好長慶の三人の家臣、三好三人衆と結んで将軍足利義輝（よしてる）を殺した。その後、三人衆が久秀を倒そうとし、大和を追われた筒井順慶もこれに協力した。そのため大和の各地で争いが起こったが、永禄10年（1567）4月から戦場が奈良に移り、両軍は東大寺と興福寺を挟んで合戦を繰り返した。鉄砲が盛んに用いられたので、一日中雷が鳴っているようで心の休まる暇がない」（『多聞院日記』）といわれるほどであった。般若寺や戒壇院をはじめ、町の一部も焼けた。

10月10日の夜、久秀の軍は大仏殿に進出した三好勢に夜打ちをかけた。火は回廊に燃え広がり、大仏殿は炎の海となって焼け落ちた。大仏の頭部と左手もまた、崩れ落ちた。

戦禍を最小限に食い止め、町を守ることができたのは町民の力であった。4年後再び戦火が起こり、久秀と順慶の軍が大安寺と辰市で合戦をしたが、奈良の町には及んでいない。久秀の支配のもとで、却って町民の団結が強まり、全部の郷を合わせた奈良町の成立が促されたといえる。

⑧ 聖武天皇陵

聖武天皇は、奈良時代の第45代天皇。仏教に帰依し諸国に国分寺、国分尼寺を建て、東大寺の大仏造立を進めた。死後、聖武天皇の遺品は光明皇后によって東大寺に献納され、正倉院宝物の母体となっている。

聖武天皇の陵墓は、『続日本紀』に佐保山で火葬され、そこに埋葬されたとある。東大寺要録によると当陵は、造営後、東大寺は山陵守をおいて祭司に当たり、後に陵の前に眉間寺が創建され奉仕していたが、松永久秀が永禄年間（1558～1570）に佐保山一帯に多聞城を築く時、眉間寺も城内に取り込まれた。その後、多聞城は天正2年（1574）織田信長により廃城となっている。眉間寺のあった北側に聖武天皇陵があった可能性もあるが、多聞城の築造及び廃城の関係で同地域は、かなり改変されたようだ。

以上 南 光弘

＜お知らせ＞

- ・郷土文化講演会 主催 河内の郷土文化サークルセンター

2月21日（土） 午後2時～4時 商大 ユニバーシティホール「蒼天」

テーマ 『魏志』倭人伝にえがかれた 女王卑弥呼の実像

講師 西川 寿勝さん（元大阪府教育庁）

参加費 500円（資料代を含む） メール kkcccircle@gmail.com またはFAX 06-4306-3035

- ・歴史探訪 魅力満載の京都名所旧跡めぐり

3月26日（木） 集合 9時30分 JR京都駅

大徳寺三門・仏堂、千体仏、総見院・織田信長墓、船岡山・建勲神社、北野天満宮、（京福電鉄）御室、仁和寺、妙心寺・退蔵院などを予定していますが、行程などは未定。後程、会報などでお知らせいたします。